

AR CA DIA

67
SPRING 2016

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



開館二十周年を迎えて

館長 榊原悟

平成八年（一九九六）七月六日、岡崎市美術博物館は産ぶ声を上げた。それから二十年が経つ。

明治時代に設立された帝室博物館を淵源とする東京、奈良、京都国立博物館は別格にしても鎌倉国宝館（一九二八年開館 以下同じ）や大阪市立美術館（一九三六年）、いくつかの私立美術館には、その設立が大正―昭和初期に遡る館が少なくない。大倉集古館（一九二七年）をはじめ藤井有隣館（一九二六年）、大原美術館（一九三〇年）、白鶴美術館（一九三五年）、徳川美術館（一九三五年）、根津美術館（一九四〇年）などがそれで、いずれも百年近い歴史を誇る。

戦後も多くの美術館が開館した。わたしがサントリー美術館（一九六二年）に勤務し始めた昭和五十一年（一九七六）十二月、最初の仕事が、同館の開館十五周年記念展の展示であったことを憶い出す。その頃は、サントリー美術館も開館間もない若い館と思っていたが半世紀余りを経過、いまや老舗館の一つに数えられるだろう。五島美術館、大和文華館（ともに一九六〇年）、山種美術館（一九六六年）の開館もこの頃だ。

さらに昭和五十年（一九七五）前後に至れば各地で公立美術館、博物館の開館があいつぐ。それらもいまや開館四十年余り、と述べてくると、岡崎市美術博物館もまだまだ若い、と言われそうだ。確かに後発館ではある。だがそれでも二十年となれば、人間ならば成人、展覧会、研究活動においてすでに充分な実を上げてきたのではないだろうか。

岡崎市美術博物館は、開館当初より「マインドスケープ・ミュージアム」との別称をもつ。現在も当館の印刷物などにはすべてこのロゴマークが入っているはずだ。これは当館の活動の基本方針を「心を語るミュージアム」に置きたいとの思いから出た愛称。人間の深い内面が生み出した表現、造形を研究し、その成果を作品・資料という具体的なものを通して提示する―思うは易く、しかし実際に行うとなると難しいが、そうした展覧会を開催すること、これを活動の基本にしたのである。

開館記念展「天使と天女 天界からのメッセージ」にして、すでにそうであった。この

ESSAY

展覧会はタイトルに謳うように「西の天使と東の天女が岡崎で出会う」ことをコンセプトに、それぞれの地域の神話や宗教が生み、育てた―その意味でまさしく心の表現たる天使と天女の造形を一堂に会し、その意味を探ろうと云うものであった。西方に誕生したエロスやキューピッド、エンジェルたちの背中にはえる「翼」が、なぜ東方の天女や仙女や観音では風を孕む「衣」になっているのか（「東の天と西の天」展覧会図録より）

展覧会をプロデュースした松岡正剛氏のこの一点の疑問を考えるだけでも意義ある試みであったに違いない。

もつとも実際の展示は、現在となつてはそれを知るための唯一の手掛りたる図録で見る他ないのだが、展示できた作品・資料が極端に限られていたとの譏りは免れえない。その結果展示作品は図録巻末に、あたかも附のように押しやられ、図版掲載された作品のほとんどは展示されないものとなった。青物編集の手法を優先させたからなのだろうが、それならばムック形式の雑誌一冊作れば事足りる。展覧会図録としては本末転倒だろうし、展覧会そのものも未消化で不満が残つたであろう。展覧会とは何より本もの・実物を並べ、それによつて何かを伝え、また考え、感じる―ことだと思ふからである。

とは云え開館記念展で、東と西の文化・造形を一堂に会し、それらを較べ見る、この方針と手法が示されたことは、この後の岡崎市美術博物館の展覧会活動を占う上でまことに意義深い。それと云うのもこの活動の基本が、もう一つの当館の基本コンセプトと結びつくことで、さらに多彩な展覧会の企画を可能にさせたからである。

その基本コンセプト。すべては岡崎が徳川家康（一五四二―一六〇六）生誕の地であることに尽きる。そこから家康の生まれ活躍した時代―十六世紀後半から十七世紀の歴史・文化・文物の研究と展示とを基本とする活動の指針が定められた。しかも都合のよいことにその時代は、まさしくヨーロッパの大航海時代の後半期に当たる。バロックの時代である。言うまでもなく西と東の政治、経済そして文化が大規模に接

触した時代だ。もとより当館第二の活動方針とも無理なく結びつく。そうであればこそか、「天使と天女」展の後も、「家康の生きた時代―東と西の出会い」(一九九七年)「新たな信仰に生きる―蓮如・ルター・民衆」(一九九八年)「大ザビエル展―その生涯と南蛮文化の遺宝」(一九九九年)など西と東を意識した展示が相つぐ。取上げた時代は異なるが「平賀源内」(二〇〇四年)「阿蘭陀とNIPPON」(二〇一〇年)も、そうした系譜に連なる展示だろう。また「イタリア・バロック絵画展」(一九九七年)にはじまり「ルベンスとバロック絵画の巨匠たち」(一九九九年)「カラヴァッジョ」(二〇〇一年)「バロックへの誘い 美術と音楽」(二〇〇二年)など、バロック美術への興味も、「家康の生きた時代」からの要請があるのだろうが、そのドラマチックな光と陰の表現在宿る深い精神性は、「マインドスケープ・ミュージアム」を標榜する岡崎市美術館博物館が開くべくして開いた展示だろうし、さらに「シユルレアリスムの巨匠展」(一九九八年)、「ベルギーの巨匠五人 アンソールからマクリット、デルヴォー」(二〇〇一年)にはじまりマックス・エルンスト、マン・レイ、ポール・デルヴォーなど二十世紀の心の表現を検証する展覧会へと拡がっていく。

一方、岡崎市美術館は、郷土博物館としての役割も持つ。徳川家康を中心に、その家臣団の事蹟を検証することや、市内の神社に伝えられた、岡崎ゆかりの文化財を発掘、調査研究し、展覧会を通して広くその価値や意味を知って貰うことである。もちろんこれには学芸員の日々の地道な活動が求められるが、その成果をいくつかの展覧会に結びつけた。いまそれらを年を追って列記すれば、

- ・松平・徳川氏の神社(二〇〇〇年)
- ・冷泉為恭展(二〇〇一年)
- ・再発見! 岡崎の文化財(二〇〇二年)
- ・徳川将軍家展(二〇〇二年)
- ・岡崎城下町の文芸(二〇〇二年)
- ・天台のほとけ(二〇〇三年)
- ・田中吉政とその時代展(二〇〇五年)
- ・徳川四天王(二〇〇六年)
- ・「中根家文書」刊行記念展 隼人がゆく(二〇〇七年)

ESSAY

・三河念仏の源流(二〇〇八年)
 ・三河の禅林(二〇〇九年)
 ・茶の湯の文明開化(二〇一〇年)
 ・三河浄土宗寺院の名宝(二〇一二年)
 ・徳川四天王本多忠勝と子孫たち(二〇一二年)

などがある。なかでも「茶の湯の文明開化」展は、裏千家十一代家元玄々斎精中宗室の生誕二〇〇年にあたり、玄々斎が三河奥殿藩松平家の出で、十歳で裏千家の養子となり、後に十一代家元を継承したという、知る人ぞ知る意外な繋がりを教えてくれた展示として大変印象深い。

以上、十九年に及ぶ岡崎市美術館博物館の展覧会を振り返ってみた。いまその名を上げた展覧会以外にも読者の記憶に残ったものは少なくないだろう。それらを含めこの間開催した展覧会は実に二五回にも及ぶ。入館者数も九十九万人を越える。大方のご理解とご支持があったものと思う。そしてこれら二五回の展示によって蓄積された情報と人脈は、岡崎市美術館の貴重な財産となるはずだ。今後ともその充実を図ると共に、それをベースにさらに魅力ある展覧会を実現すべく努めたい。「開館二十周年記念 大鎖国展」は、その決意表明でもある。

それにつけても思うのは、開館以来の懸案である本館建設問題である。岡崎市およびその歴史と文化を知り、さらに未来への展望を開く上でも、そうした資料を展示するための常設室を含む本館棟は必須である。幸いにも寄託品も含め近年、岡崎市美術館博物館に収められた資料は目を見張るものがある。それらを展示し活用することは郷土岡崎に資するところ甚大であるに違いない。本館建設を改めて強く希望すると共に市民はじめ関係各位のさらなるご理解とご支援をお願いする。



大鎖国展

—江戸に咲いた異国の花—

湯谷翔悟

画像1



まずは
【画像1】
「都鄙図巻」
(No.6、画像
提供：奈良
国立博物
館、撮影：森
村欣司)。貴
族から庶民
までの生活
風俗を、四
季の移ろい
の中に描き
込んだ、住

国宝・重文二〇点あまりをはじめとした、日本中の優品約一六〇件が集結した「大鎖国展」。美術・歴史の枠に捉われない総合的な展示となつているのは、美術博物館という当館の特徴を表しているように感じます。先号にも書きましたが、とにかく資料・作品の幅が広く、意外なものまで展示されていることに驚かれるさまも見かけます。そこで今回はその展示の幅広さをご紹介すべく、「鎖国」という言葉からは少しイメージしにくい資料・作品のお話をしていきたいと思えます。

EXHIBITION

画像2



【画像2】は「更紗 尽し掛物」(No.54)。ターバンを頭に巻いたエキゾチックな絵ですが、実はこれ、輸入染織である更紗です。それだけでなく、掛軸の表装まで全て更紗で仕立てられています。一幅まるごと更紗という、粹でぜいたくな「鎖国」の中の珍品です。

吉具慶の代表作です。描かれた時期は一六九二年から二七〇五年に特定でき、これは『日本誌』を表したオランダ商館医のケンペルが観察した時期と重なります。この『日本誌』を基に記されたのが「鎖国」という言葉をこの世に生んだ一冊です。つまりこの「都鄙図巻」は、ケンペルが「日本は鎖国している」と評価したまさにその時代を描いた作品といえます。しかしその中に描かれた、望遠鏡をのぞく武士の姿。望遠鏡は異国からもたらされた器物です。太平の日本を描いた作品に描き込まれた「異国の眼」は、「鎖国」とは何か、改めて問いかけてきます。

画像3



この展覧会では、江戸時代の日本における異文化の広がりを取り上げていきます。異文化は鎖国という言葉から想像されるよりもずっとバリエーション豊かに日本にもたらされ、江戸の生活に重大な影響を与えています。そうした異文化受容の一端をここではご紹介していきます。

【画像3】の動物は何でしょう？ラクダですね。恐らく皆さまパッと見て分かったと思います。それは例えば動物園でホンモノを見たことがあるとか、テレビや図鑑で既に見たことがあるからでしょう。しかし江戸時代の人々はこれがラクダとの初対面。それはさながらパンダの初来日のようなラクダファイバーが、行く先々で巻き起こりました。人々は珍獣の姿や行動の特徴を事細かに記録していきますし、画家はこれ格好の画題だと、ラクダの絵を残しています。こちらそんな1枚。上田公長による「双駱駝図」(No.139)、新出の作品です。伏し目がちな目と、少女マンガさながら

会期：平成28年4月9日(土)～平成28年5月22日(日)

画像4



『四十二国人物図説』(No. 124)などはその代表格。しかしそうした世界の広がりを目で知る、もつとも効果的な手段は地図です。【画像4】は二六四五年製の、日本で初めて刊行された世界地図「万国図」と「人物図」(No. 116)です。「人物図」は世

画像3部分



の長いまつ毛。素早い筆致ゆえ、作者が注目したラクダの特徴がかえって鮮明に見て取れます。まあ細かいこと抜きにして可愛。本展ではラクダの作品が前期六点・後期七点並びま

す。それぞれの作者がどこに注目しているかを見比べるのも面白いと思います。江戸時代の異国との接触というと、朝鮮通信使や琉球使節が浮かびますが、舶来のラクダや同じく江戸時代にやってきたゾウも、世界を意識する機会になったことでしょう。もつともそうした特別な機会だけでなく、本や版画などで日常的に世界を知ることができました。『増補華夷通商考』(No. 123)や

EXHIBITION

画像5



は誤解を伴いながら、ロマンや憧れにも似た感情を抱いていました。そうした人々の憧れは、

界四〇ヶ国の人々を男女二対で描いています。サムライ姿の日本や中国・朝鮮などは比較的描き分けられています。それ以外の国はみな似たような出で立ち・風貌をしており、区別が難しいほどです。加えてこの人物図には「小人国」・「長人国」まで掲載されています。小人国の人々の身長はおよそ三、六センチ、長人国は三、六メートル。さらにはこれらの国もちゃんと「万国図」に位置が記されているのです。現代の私たちからすると、そんな国は実在するはずがないと笑に付すような記載ですが、江戸時代の人々は海外渡航が禁止されました。そのため実際に自分の眼で確かめることができない彼らにとって、このような刊行物からもたらされる情報

が、当時の人々の知りうる「世界」でした。今よりずっと広く遠い世界に、人々は誤解を伴いながら、ロマンや憧れにも似た感情を抱いていました。そうした人々の憧れは、物から見て取れます。例えば【画像5】たばこ入れ(No. 161)は、金唐革を素材に作られています。金唐革は革に金銀箔を乗せ型押ししたもので、ヨーロッパでは部屋の壁紙として用いられたものです。それが日本にもたらされ、こうした人びとの携行品に用いられています。金唐革や更紗などの輸入品をお洒落に取り込む。今の私たちがインポートブランドに抱く憧れとの共通性を感じてしまいます。

開館二〇周年を迎えた当館。心を語るミュージアム、洋の東西の交流、そして家康を展示の大きな柱として様々な展覧会を企画してきました。家康が礎を築き、その後二五〇年におよぶ泰平を誇った江戸時代と、その中で営まれた異文化との交流のすがたを示す本展覧会は、当館二〇年の歩みを受け継ぎ、それを発展するべく踏み出す第一歩です。「鎖された」とされる江戸時代を見つめ直すことで、現代は本当に「開かれた」時代なのか。そうした現代の世と、そこに暮らす私たちの心を見つめ直す機会としてもらいたい。それが「心を語るミュージアム」の「スタッフ」として、本展を任された私の届けたい思いです。

福山市は瀬戸内海の中央に位置し、人口は広島県第二位の約四十七万人、面積約五二〇km²の備後地域の中核都市です。岡崎市と福山市はともに大正五年（一九一六）七月一日に市制を施行したと、さらに徳川家康と福山藩開祖の水野勝成が従兄弟であることなどから、昭和四十六年に親善都市の提携をしました。今年は今両市がともに市制一〇〇周年を迎えることから、これを記念して福山の文化財の優品を展示し、その歴史と文化を紹介する展覧会を開催します。ここではその中から鞆の浦と水野勝成について紹介します。

鞆は沼隈半島の先端部に位置し、古くから潮待ちの港として、また瀬戸内海の要港として栄えてきました。眺望の美しさから国指定名勝に指定されており、江戸時代に鞆に寄泊した朝鮮通信使の李邦彦は「日東第一形勝」と賞賛しています。鎌倉時代創建の安國寺（当時は金宝寺）には文永十二年（一二七四）に造像された像高一七〇cmに及ぶ阿弥陀如来及び両脇侍像（重要文化財）や鎌倉時代後期の頂相彫刻の傑作法燈国師坐像（重要文化財）が安置されており、阿弥陀如来像の胎内に納入されていた勸進帳からは、造像に際し民衆からの寄進に加

え、鞆港へ寄港した船からも寄附を募ったことがわかります。これだけの優れた仏像が鞆に存在することは、当時鞆が要港として興隆していたことを示しています。南北朝時代には戦略上の要衝として争奪の対象となり、室町時代には明や朝鮮との交易により一層の繁栄をとりましました。江戸時代には北前船や九州の船が次々と寄港、また朝鮮通信使も全十二回のうち十一回来航しています。福禅寺の境内には通信使の正使、副使、従事官の三使の宿所として名高い「対潮楼」が現存しており、通信使の詩書など数多くの文化財が所蔵されています。鞆は鎖国時代の日本において貴重な異国との文化交流の場となり、菅茶山や頼山陽など当代一流の文化人も訪れています。

水野勝成は元和五年（一六一九）大和郡山より備後十万石で入封しました。勝成は徳川家康の従兄弟にあたり、大阪夏の陣で活躍するなど武勇の誉れ高く、この入封は当時池田氏、毛利氏など外様大名で占められていた山陽地方の「西国の鎮衛」としての使命を担うものでした。幕府は短期間での築城を命じ、勝成は入国後すぐに領内を巡視、芦田川河口のデルタ地帯を押さえた要害の地で、南は内海に臨み、鞆との交通の便も良い

EXHIBITION

常興山を選定しました。築城に対しては、幕府から御助力として金二六〇〇両などを拝借し、京都伏見城解体の建材より御殿や櫓などが下賜され、元和八年八月に竣工しました。城郭規模は敷地面積七八〇〇坪、二重の堀を巡らせ、本丸には五層の天守閣がそびえていました。築城当時帯は茫々たる葦原であり、勝成は築城と同時に城下町を造成する大工事を行い、地名を「福山」と名付けました。さらに新田開発や土地造成を進め、水野時代には備後表・木綿・塩などの特産物が育成されました。また勝成は能を嗜むなど、文芸にも通じており、鞆の沼名前神社には勝成が秀忠より拝領した豊臣秀吉遺愛の伏見城の組立式の能舞台（重要文化財）が現存しています。

本展は他にも、細形銅矛など旧石器から古墳時代の出土品、備後一宮である吉備津神社や真言宗の古刹明王院の名宝、今は芦田川の中州に眠る草戸千軒町遺跡の出土品、江戸中期以降福山藩主を務めた阿部家の名品など、福山を象徴する文化財を一堂にご覧頂けます。本展が福山市への理解を深め、岡崎市とのさらなる交流の契機となれば幸いです。



福禅寺対潮楼からの眺め

企画展 岡崎市制100周年記念 親善都市 福山の文化財展

浦野加穂子

会期：平成28年6月4日（土曜日）～7月18日（月曜日・祝）

開館二十周年の豊富

開館二十周年を迎えた岡崎市美術博物館。これまでの成果を受け継ぎ、どのような館にしていくなか。各学芸員の抱負を記します。

副館長 堀江登志実

当館は開館して二〇年になる。二〇年は人間でいえば成人、一人前となる年月である。ところが当館には未だ常設展示室がない。岡崎の歴史を通観するスペース、岡崎の美術作品を常時展示するスペースがないのである。こうした博物館・美術館は一人前とは言えない。オープン当初の計画ではⅠ期工事に続きⅡ期工事で常設展示を含む本館棟を完成させる予定であったはずである。よく、企画展を見たから常設展示はないか、また、寄付または寄託したものはいつ展示されるかという問いを受け、心苦しい思いをする。二〇年目を迎えるにあたり、常設展示室の設置にむけての思いを新たにしたい。二〇年間の蓄積を發揮するためにも。

学芸班長 村松和明

平成八年七月六日午後六時、夕陽に照らされた和太鼓の勇壮な響きと共に当館の扉は開かれた。「心を語るミュージアム」として開館して、はや二〇年、実に二

五本もの展覧会を開催してきた。気が付けば開館当初からの学芸員は私だけとなった。今年度は新たに若い学芸員が二名仲間入りした。時代はめぐり、語る心も変化しているはずだ。この二〇年を一区切りとして、最先端の芸術表現から歴史の深遠なところまで、学芸二丸となって意欲的に取り組んでいきたい。

浦野加穂子

当館では考古から現代美術まで、幅広い分野、地域、時代の展示を行ってきた。それは当館の特色であり強みでもある。一方で岡崎市の郷土に根差した博物館としての役割も重要である。家康をはじめとする三河武士の関係資料、市内の寺社や旧家の文化財調査を丹念に積み重ね、その成果を展覧会を通して広く知っていただく。当館でしかできない、当館がすべき展示を心掛けていきたい。

内藤高玲

今から二十一年前の平成七年の五月、現市民病院の敷地内で確認された古墳の発掘調査をしていた。美術博物館はすぐそばで建設されていたが、自分にとって「夢」とか「希望」という感じだったことを覚えている。

COLUMN & TOPIC

それから二十一年が経ち、改修に関わり、開館にこぎつけることができた。機能回復がなされ、良好な展示環境となった今、それをどういう使い方をしていくのか、考えることは山とある。今は「現実」なのだから。

湯谷翔悟

心に描かれる風景を意味する造語の「マインドスケープ」。馴染みない言葉かもしれないが当館の愛称である。館名である以上、このマインドスケープをより意識した展示をしていきたい。マインドスケープの源には、自身の経験や学んだことがあると思う。であれば自分の心の風景を見つめるには、歴史の展示こそうってつけなように感じている。歴史を通して心と向き合う、そうしたシーンを作って行けたらと思っている。

伊藤久美子

岡崎市の財産である収蔵品を良好な状態で後世に残すべく、収蔵環境の管理に一層の力を注ぎたいと思う。そして、少しでも多くの収蔵品を公開できるよう整理、調査研究を進めたい。この建物との関わりは建設前から。今は閉館となった郷土館で美術博物館へ収蔵すべく膨大な資

料と格闘していたことを思い出す。いろいろな「本物」に直接触れることができる仕事に感謝しつつ、これからは資料と向き合っていく。



開館直前の当館と現在の当館。館の周りの緑のように、館も館員も成長して参ります。

INFORMATION

■岡崎市制100周年

親善都市 福山の文化財展

会期：平成28年6月4日(土曜日)～7月18日(月曜日・祝)

■講演会

草戸千軒と輶一よみがえる中瀬瀬戸内の港町一

日時：6月19日(日)午後2時～

講師：鈴木康之氏(県立広島大学准教授)

天下の名城 福山城の魅力

日時：7月3日(日)午後2時～

講師：三浦正幸氏(広島大学教授)

能への誘い～家康・勝成が愛した芸能～

日時：7月17日(日)午後2時～

講師：大島輝久氏(能犬鳥家5代目、能楽シテ方喜多流職分)

大島衣恵氏(能楽シテ方喜多流)

演目：仕舞「八島」 謡「福山」

■ギャラリートーク

日時6月25日(土)・7月9日(土)

美術博物館年間パスポートがリニューアルしました

■年間パスポート[Museum-pass]

購入日から1年間何度でも無料で観覧できるパスポートです。

- ・一般 3,000円 ・ペア 2,000円 ・学生 2,000円
- ペアは一般会員と同時購入する同居家族の方
- その他、お得な特典もついています。

■展覧会限定(リミパス)も新登場!

「この展覧会だけ何度でも見たい」という方にオススメの美術博物館限定フリーパスです。

- ・リミパス(Limi-pass)600～1,800円
- 展覧会により価格等が異なります。

※詳しくは、当館までお問い合わせください。

雨の日とカサ

新年度となり、新一年生を見かける。体より大きな真新しいランドセルを背負って歩く姿は、これからの学校生活が楽しいものであるようエールを送りたくなる位、ピカピカに輝いている。我が家のご近所にも新一年生がおり、先日、そのお母さんが登校する子どもを送り出していた。しばらくしてもお母さんは道端に立っていた。雨の朝であった。どうかしたのかと思っていると、カサをさして歩いたことがないから心配で心配で...という言葉。カサをさして無事に雨の中を歩いていけるのか、我が子の姿をずっと見守っていたのだ。

そうか。生まれた時から車での移動がごく当たり前となり、子ども達にとつてカサを使う機会が減っているのだ。大雨の中をさぶ濡れになって歩くこともなく、大抵は車でお迎えの時代。カサのさし方も日常の中で自然に身につけるのではなく、教わる時代なのか。と思いつつ、自身も車移動ばかりの毎日だ。雨降りの日のみならずカサを持つて歩くこと自体なんとも億劫に感じているではないか。

「あめあめふれふれかあさんがじゃのめで おむかい うれしいな♪」と童謡の一節の中で流れた雨の朝の「コマ。が、ここに歌われている情景も子ども達には分からないか。(伊)

おしゃべり、あれこれ。

勝手気ままな私的散策ノート

三月の下旬に大学院でお世話になった先生と足助を訪れた。足助には大学生の時に一度行ったきりである。東岡崎駅から名鉄バスで約一時間程かけて足助に向かった。岡崎市から足助に近づくにつれて自然豊かな景色が飛び込んでくる。移り変わる風景をバスの中で「ぼー」と眺めていると足助に到着していた。先生とはバス停で合流し、早速足助の古い街並みが残る重伝建地区を散策した。お昼になり地区内にある先生オススメのお店で蕎麦を食べた。今でもあのお店の蕎麦を食べたいと思う時がある。それぐらい美味しかった。食事後、香積寺に向かい住職さんに書画で有名な当寺ゆかりの風外和尚の話聞いた。その後、カタクリの花を見にカタクリ群生地に向かった。群生地には斜面一帯に無数のカタクリの花が咲いており、それはとても美しく思わず携帯で写真を撮っていた。秋の足助もよみが春の足助もまた一興である。自然と歴史を満喫し、あつという間に時間が過ぎ名残惜しさを感じながら足助をあとにした。この散策を機にこれから各地を散策しようと思っている。運動もかねて。次はどこに行こうか。誰も興味はないだろうが乞うご期待。その前にデジカメを買わなければ。(柴)

編集後記 | 開館20周年を迎えた当館。本号では館長および各学芸員の思い・抱負を掲載しました。また「大鎖国展」・「親善都市 福山の文化財展」をご紹介しています。岡崎市美術博物館の再スタートへの思いを込めた67号、ご味読ください。(湯谷)

表紙図版：金箔押長烏帽子形変わり兜(福山城博物館蔵)



開館時間 午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第67号 2016年5月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA